

シャピユイと呼ぼう

オゾンの可視光吸収帯を初めて見出したのは J. Chappuis です (小川 (1991) の本文および巻末文献参照)。彼 (男性であることは確かです) について調べようとしたのですが、論文以外には何も手がかりがありません。ファースト・ネームもイニシャルだけしかわからないし、どこの町の人だかもわかりません。フランスのジャーナルにフランス語で論文を書いているのでフランス語圏の人だろうと見当をつけています。フランス人ならば「シャピユイ」と呼んであげるのがいだろうと思うのです。日本では一部「チャピウス」という呼び方が通っていたので、私は折を見ては訂正申し上げることにしていたのですが、

なぜ日本で「チャピウス」という呼び方が流布したのか、これには私にも責任の一端があるようです。実は私も一時期「チャピウス」だとばかり思っていましたし、これを島崎さんに教えたのもどうやら私だったようです。以下は、なぜ誤って「チャピウス」となってしまったかのお話です。

1960年代、私が等松教授のもとでオゾンの研究を始めた頃、可視域におけるオゾンの吸光係数のデータとして最も信頼のおけるものは Inn・Tanaka (1953) の測定値でした。この論文を読んでもそこにはシャピユイの原論文は引用してないのですが、「Chappius band」と記してあります。このおふた方は在米の朝系と日系の方ですから、あまり馴染みのないヨーロッパ人の名前の綴りをすっかり間違えられたのか、同僚が誤って教えたのでしょうか。とにかくこれが日本で間違いを広めるものとなりました。当然のことながら、永田・等松 (1973) の教科書には「Chappius」と間違っ

て記されています (英訳改訂版の Tohmatsu (1990) では「Chappuis」に直してあります)。等松教授がこの本を執筆していた頃、私は米コロラド州ボウルダーで島崎さんと一緒に成層圏の研究を始めたところでした。彼に「チャピウス」とインプットしたのは私以外にはいないでしょう。だから島崎さんの本 (松野・島崎, 1981; 島崎, 1989) で「Chappius」なり「チャピウス」

となっているのは私のせいといわねばなりません (島崎さんの英文の教科書 (Shimazaki, 1985) では Chappuis と直っています)。

「チャピウス」と呼ぶのが誤っていたことに気づいたのは、日本に帰ってからのことです。マルセル・ニコレが成層圏オゾンについて書いたレビュー論文 (Nicolet, 1975) を読んで Chappuis の業績を知り、その原論文に接した時です。それ以後は事あるごとに皆さんに訂正して廻っていたのですが、最近はそのようなこともしなくなりました。この点改めて注意を喚起していただいた岩井氏に感謝します。

(東大理 小川利紘)

参考文献

- Inn, E. C. Y. and Y. Tanaka, 1953 : J. Opt. Soc. Am., 43, 870.
 Nicolet, M., 1975 : Rev. Geophys. Space Phys., 13, 593.
 Shimazaki, T., 1985 : Minor Constituents in the Middle Atmosphere, Terra Sci. Pub. Tokyo.
 Tohmatsu, T., 1990 : Compendium of Aeronomy (ed. by T. Ogawa), Terra Sci. Pub. Tokyo.
 上記以外の日本語の文献は岩井氏の文についています。

【編集委員会注】

ここに掲載した会員の広場の記事に関連して、編集担当理事の関口理郎氏より以下のような情報が寄せられています。参考のために掲載します。

- (1)1956年 (昭和31年) 1月に榑地人書館から発行された山本義一著「気象輻射学」(気象学講座第4巻)の60ページに、「Chappuis 帯」と記載されており、また第29図に「Chappuis 帯の吸収係数」が示されている。
- (2)1964年に OXFORD 出版から発行された Goody 著「Atmospheric Radiation」の212ページに「Chappuis band of ozone」と記載されており、また Fig. 5. 19に Vigroux (1953)からの引用として、「オゾンの Chappuis band の分子吸収係数」が示されている。